

第2報告

地域経済分析とフィールドワーク

— 大学が求められる地域貢献とは？ —

Analysis of Regional Economies and Field Works

— What is the Contribution to Local Community? —

佐々木 達

経済学部の佐々木です。よろしくお願いたします。今回はこのような機会をあたえていただき、誠にありがとうございます。先ほど、小内学部長から、これが社会情報学部の最後のシンポジウムであるということと学内の先生のみで開催することも初めてに近い試みだということで、こういう場にお呼びいただき大変光栄に思っております。私の方からは、いわゆる僕の専門領域から見て、フィールドワークとはどのような位置づけにあるのかということ、それから今回大学で求められている地域貢献とは何かということについて話題提供として報告させていただきます。

今日の報告は全部で四つのパートからなります。本シンポジウムで報告させていただくにあたって大國先生から最初お誘いいただいた時に、二つ返事で引き受けてしまったのですが、フィールドワークって何故やるのだろうと根本的なところから考え始めてしまったため、雑駁な報告になってしまったことをはじめにお断りさせていただきます。

1. はじめに

私の専門領域は地域経済論、経済地理学という分野になります。方法論としては、経済現象の場所的差異や経済の地域的個性がいかにかに形成されているのかを明らかにするものですが、そのための分析方法としてフィールドワークが重要な位置を占めております。

フィールドワークに関しては、今回の報告依頼を受けた時に二つの点から考えました。まず一つはフィールドワークと言っても私の専門分野の地理学だけではなく、いろいろな

研究分野でなされているわけで、それぞれの分野でどのような位置づけを与えられているのかという点です。換言すれば、フィールドワーク科目が各学部にとって必要とされる理由はどのあたりにあるのだろうかということです。もう一つは経済学部における調査系科目である「産業調査演習」の実践紹介を通じて、フィールドワークが教育効果を含めてどのようなことが期待できるのか、調査系科目の現状や課題に関する論点整理を行うことです。本報告ではこれらの点を念頭に置きながら、第一に地域経済分析におけるフィールドワークの位置づけを検討します。そして、第

二に経済学部の開講科目である産業調査演習の実践事例を紹介し、最後に調査系科目と大学が求められる地域貢献との関連性について、自分なりの意見を述べさせていただきます。

2. フィールドワークはなんのためにするのか？

・地域経済分析の目的

地域経済分析の目的を説明する前に、地域経済論あるいは経済地理学という分野ではどのような方法論で地域にアプローチしているのかについて少し紹介をさせていただきます。冒頭でも触れましたが、斯学では経済現象の場所的差異、経済の地域的個性がいかに形成されているのかを明らかにすることに主眼が置かれています。その中でも、マクロ経済学の所得決定や成長理論をベースにした地域経済の発展・衰退メカニズムを分析することが一つの分析方法となります。さらに、ミクロ経済学における企業行動や産業組織の問題は経済立地論として地域の空間構造を分析することもアプローチの一つです。そして、これらを通じて経済現象の展開の中で形成されてくる地域経済の論理と個々の地域経済循環を統一的に把握することで存在構造を明らかにすることに関心があります。

・フィールドワークの位置づけ

こうしたことを踏まえて、フィールドワークは何のためにするのかという問題に入っていきたいと思います。フィールドワークとは統計や資料ではとらえきれないダイナミズムをいかに検出する、あるいは打ち立てた仮説を検証するために実証分析のツールとして位置付けられていると一般的に説明できるように思います。しかし、ここまでは理解したとしても、どうしてわざわざフィールドまで出かけて行って調査をするのだろうかと考えてみるとはっきりとした回答を与えることがで

きないような気がします。私自身もこの機会に様々な文献を紐解いてみましたが、いずれの文献もフィールドワークの方法論については詳細に説明していますが、フィールドワークの哲学的な側面に触れたものは非常に少ないという印象を持ちました。その中でも上野(1972)は、地域調査研究というのは「自然や人間集団の時間的・空間的な存在構造を明らかにするものとして位置づけられる。…(中略)…その存在構造は、地域性という具体的な現象を呈しているため、その地域性の把握を通じて、自然や人間集団の本質を認識することができる」と説明しています。これは、自然と人間集団の本質を時間的・空間的に理解したうえで存在構造を明らかにすると規定している点において、フィールドワークの意義をある程度説明しているものと思います。しかし、私はこれを地域経済論に引き付けて以下のようにフィールドワークを捉えることにしました。すなわち、地域に焦点を当てつつ、経済現象がどういう論理や理屈でそこに存在しているのかを把握することで、「自分たちがどこからきて、どこにいて、どこに向かうのか」ということを抽象力で構想する、いわゆる社会科学の一つとしてフィールドワークというのは有効なツールなのだ、ということです。

・フィールドワークの目的論的類型（仮説）

さて、フィールドワークの目的を以上のように設定したうえで、様々な学問分野で実施されているフィールドワークをアプローチ別に類型化すると、仮説的におおよそ四つくらいにわけられるのではないかと考えました。一つ目「運動論」としてのフィールドワークです。いわゆる地域づくりという言葉でも言われますが、地域住民の要求や実践課題に応じていくためにフィールドワークを実施していくものです。ここでは、地域住民の主体性の把握や地域に存在している利害関係をいか

に把握して調整して、期待に応じていくのかに主眼が置かれることになります。二つ目は、「政策論」としてのフィールドワークです。ある目的から実施された政策効果を検証したり、フィードバックしたりするために行われるものと、政策立案のために基礎的判断材料を収集するための方法論としてフィールドワークが位置づけられる場合があると思います。三つ目は、研究分野における「学術論」としてのフィールドワークです。それぞれの研究者の問題関心に即して課題を設定し、それに対して仮説・検証をするためにフィールドワークを実施していく場合にはこのアプローチが採用されています。

そして四つ目は、「教育論」としてのフィールドワークです。ここでは、大学教育の一環として実施されるフィールドワークがどのような成果を期待するのだろうかという問題があります。実際に、私が担当しているフィールドワーク科目においても、「お調べ学習」の域にとどまっている現状や学生の主体性をどのように引き出すかといった課題も散見されます。したがって、大学あるいは学部での教育の一環としてフィールドワークを実施する場合には、成果としてどこまで求めるのか、何を期待するのか、ということが問われるだろうと思います。

・小括

このように、フィールドワークはそれぞれの学問分野やアプローチの違いによって異なる目的が設定されるということに関しては大筋の合意が得られるところであろうと考えます。しかし、大学教育におけるフィールドワークは、先ほどの目的別類型論的な考え方に照らせば、学術論、運動論、政策論、教育論のどの領域からアプローチすべきとされるべきかという問題があります。研究者としては、学術論としてフィールドワークを行なうことは自明のことになっていますが、大学教育の

一環としてフィールドワークを行なう目的については必ずしも明確になってはいないのではないかと考えるからです。そこで、次に報告者の教育実践を事例に、大学教育の一環としてフィールドワークを行うことはどのようなことが成果として期待できるかを検討したいと思います。

3. 経済学部開講科目 ― 産業調査演習の事例 ―

・産業調査演習とは？

経済学部の開講科目の産業調査演習は、学部実習科目として、1996年度より開講されています。前期2単位の半期科目として開講しており、現地調査は夏季休業を利用しておこなわれています。本科目のねらいは、特定地域の産業を調査し、地域経済が直面する課題を発見し、解決への方向性を学生自身が見出すことにあります。したがって、半期の開講科目ですが到達目標としては、①地域統計・資料のデータ分析に習熟すること、②聞き取り調査やアンケート調査の設計・実施、③調査結果を報告書にまとめること、④調査結果の報告会の実施を設定しています。③と④については前期の単位判定後の作業になりますが、後期にかけて報告書を作成して調査結果の報告会も実施することをルールとして設定しています。

・2013年度の産業調査演習

私は2012年から産業調査演習を開講していますが、今回の報告では2013年度と2014年度の事例を紹介します。2013年度の産業調査演習は十勝支庁音更町で実施しました。対象地域の選定については当初、学生と相談して決めようと思っていました。ところが、学生諸君からの希望は特にありませんでしたので、私の学術的関心に照らし合わせて調査計画を立てて音更町を選定しました。音更町を選んだ理由については、小麦の生産量が市町

村別で日本一であったことから、どのようにして主産地を形成してきたのかを知りたいと思ったということが一点目です。二点目は、十勝は大規模畑作農業地帯ということがよく言われていますが、地域経済という視点から考えた場合にどのような問題があるだろうかと考えたからです。現地調査は、2013年7月17日から20日の3泊4日で実施しました。参加人数は15名ですが、このうち多くが私のゼミ生です。余談になりますが、入試の面接ではフィールドワークに興味があると答える学生も多いのですが、実際に3年生になって開講すると希望者が少ないというのが現状です。したがって、今のところ2年次のゼミ募集の段階で産業調査演習も受講してくださいとアナウンスしたうえで受講生を確保しています。受講生を増やすためにはこちら側でもう少し工夫が必要であると考えています。

調査内容は、今回は農家の聞き取り調査の練習と工場見学視察、それから農協や役場での聞き取りというようなことを設定しました。役場でのヒアリングについては、はじめに職員の方から音更町に関する概要の説明をしてもらい、その後に学生たちが事前に用意した個別の質問をしていくというスタイルで実施しました。

農業生産者へのヒアリングは四つのグループに分かれて行いました。移動については役場の職員の方にも協力をしてもらいました。グループごとに一日4軒ずつ回ってヒアリング調査を実施しましたが、学生たちはヒアリング調査自体が初めての経験であったため、極度の緊張感に疲れ果てた様子でした。企業視察では、山忠（やまちゅう／株式会社山本忠信商店）という十勝小麦を活用している企業の工場見学を行いました。

・2013年度の産業調査演習

2013年度の産業調査演習は、調査最終日に

音更役場職員との意見交換会を実施しました。音更町、あるいは十勝自体に訪れたのが初めてという学生も多かったので、調査の感想や初めて訪れてみての印象など、現地の方と話す機会を設けて意見交換をしました。調査結果については、講義の一環として報告書を作成しました。そして、私のゼミでは釧路公立大学で開催される学生研究発表会(SCAN)に参加して、研究報告するという活動も行っています。これを私は、調査を実施するだけではなく、調べたことを自分たちで論点を焦点化して報告会に臨むという学生の考える力を伸ばす機会として位置づけています。研究発表会に参加するためには、自分たちで調査した内容や意味を再検討しなければならないし、発表するための論理構成を考える作業は避けて通ることはできません。学生たちは非常に苦勞して頑張ってくれていますが、こちら側としてはチームワークで報告の準備を行うことでプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力といった就職活動でも必要とされるスキルを磨く場所を意識的に作り出すという隠れたねらいもあります。

・音更町での調査その後

ちょうど我々が2013年度に調査に行った時に、音更町では「食」をキーワードにした食育や地産地消の取り組みを本格化させるといった計画がありました。しかし、音更町で生産される農産物の多くは道外に移出されているのが現状ですから、もし地産地消を本気で取り組もうとすれば地域農業や地域経済の構造を一から見直す必要があったのです。そこで、産業調査演習の縁もあって私の研究室で計画の具体化と基礎的調査の実施などのお手伝いさせていただくことになりました。ちょうど音更町も農水省から「食のモデル地域構築事業」の予算を獲得することが決まっていたので、「地産地消率アンケート」や「地場産農産物利用実態調査」を調査計画に盛り込み

ました。さらに、地産地消にかかわって地域の伝統食にも目を向けようということで、入植から伝わってきた各家庭の郷土料理調査も加えることにしました。音更町の場合、北陸からの移入者が多いということは伺っていたので、伝統文化や郷土料理が今でも存在しているのかどうかを含めて調査を試みようということになりました。こうして、次年度の産業調査演習も引き続き音更町で実施することになったのです。

2013年度は事前調査という位置づけで、2月と3月を利用して音更町産の小麦を活用したうどんづくりの体験と学生による食味評価アンケートの実施、伝統食の試食会を実施しました。この時は、3年生と4年生のゼミ生30人ほどでお邪魔し、学生たちなりの意見を向こうに届けてきました。伝統食については「味噌かんぶら」という北陸地方でよく食べられているお菓子を農家のお母さんたちに作っていただきました。このお菓子は、昭和30年代頃には子どものお菓子として各家庭で良く作られていたものだそうです。他にも「よもぎパン」や「大豆汁」などの各家庭に伝わってきた料理をふるまってもらい、レシピ作成を行ないました。

そして、2013年度には「おとふけ食のフォーラム」を開催し、夏の産業調査演習の内容を町民の前で報告するという事も実施しました。町民の方たちもこのような機会がなかなか無かったということで、非常に喜んでいただきました。とくに学生が目線から音更町はどのように映っているのかを聞くことができたのが好評だったので、来年も学生から忌憚のない意見を出してもらいたいという意見をもらいました。それならば、来年は地場産農産物の利用実態調査を産業調査演習として実施して、報告会も実施しようということになりました。

・2014年度の産業調査演習

2014年度の産業調査演習は、町の要望も勘案して「食と農を価値とした地域経済の活性化戦略」というテーマを掲げて地産地消の可能性を把握しようとなりました。この時も3年生が15名であり、調査時期も7月中旬に設定しました。調査内容は、地元の食品加工企業の地場産農産物の利用実態調査、地域資源の発掘調査、農業生産者への地場産農産物の出荷状況のヒアリングを中心に計画しました。計画の際には町の要望も勘案して、役場職員と相談しながら調査設計をこちらで準備したという経緯になります。

地域資源の発掘調査については、十勝川温泉周辺の景観調査を貸自転車に乗りながら行いました。食品加工企業の調査は、町内に複数社存在する豆腐屋さんと納豆屋さんを訪問して地場産農産物の利用実態についてヒアリングを実施しました。音更町は畑作4品目の生産量が多く、大豆も生産しているのですが、実際に調べてみると地場産の大豆の使用量はそれほど多くありませんでした。どうやら、聞き取りをした企業では、自社の豆腐や納豆には十勝産大豆が適していないというのが理由らしく、地産地消にこだわる必要がないという意見も聞くことができました。地場産農産物の出荷状況の調査については、生産者の人たちと交流しながら話を伺う計画を立てました。そこで、協力いただいた集落の集会所周辺でバーベキューをしてお酒を飲みながら、農業生産者の皆さんからいろいろなお話を聞くことが出来ました。

2014年度も昨年に引き続き「おとふけ食のフォーラム2014」を開催し、ゼミ生による「音更町における地産地消の実態と課題」、「音更町を訪れて一食と農をつないだ地域経済の活性化戦略」というテーマで報告を行い、私も「地産地消がもたらす地域への経済効果」という題目で講演をすることで、2年間の調査結果を地域にフィードバックさせていただきま

した。

・フィールドワークの成果：地域との関わり

フィールドワークの成果についてですが、やはり一つは、地域との関係性の構築が挙げられます。当初は、学生への教育の一環としてフィールドワークを実施でした。対象地域の選定も教員の学術的関心から設定し、学生に対して調査方法や地域経済の分析方法を教授することが主たるねらいであったわけです。ただし、せっかく現地に入って調査するのだから、調査結果は現地にフィードバックすることは、調査でお世話になった方々に対する責務であろうと考えて報告会を実施することは想定しておりました。

しかし、偶然にも音更町が地産地消や食育の取り組みを本格化させる計画作りに着手していたことと私たちの産業調査演習のタイミングが重なることで、その後の調査活動や交流をより深める方向へと展開するに至りました。先に述べたフィールドワークの目的論別類型に従えば、教育論から運動論へと展開していった事例が、音更町での2年間の産業調査演習であったと位置づけることができます。すなわち、大学の開講授業から地域との関係性を構築する中でニーズに応じたフィールドワークへと展開していったと見ることができます。もちろん、単に調査活動を行っただけでなく、成果物としては報告書が2本、私自身も学術論文を作成させていただきましたので、底流として学術論も包含していたこととなります。

・フィールドワークの成果：教育効果の側面

次に教育効果の側面について検討します。今回、産業調査演習の受講生の大半は札幌市の出身の学生が多く、農業や農村に関する知識はほとんど持っていない状況でした。しかし、現場に行くことによって、地域問題や経済事情に関心を抱くようになったことが挙げ

られます（学習意欲の喚起）。二つ目として、多くの学生は普段、同年代としかコミュニケーションをとる機会がないため、年長者に話を伺うことがほどよい緊張感や自分の価値観の見直しにつながっていると思われます（コミュニケーション能力の喚起）。企業を訪問して聞き取り調査をしますので、訪問先でちゃんと挨拶をするだとか、御礼を述べるとか社会人として基本的なことを地域に行くことやらざるを得ないということもあり、ほどよい緊張感を持ちながら調査をすることが学生にとっても、新たな発見や気づきといったことを与えてくれたと思われます。

三つ目として、現場で働くということを通じて直接知ることによって、就職活動での業界選択の足掛かりをつかむ学生も見られることは自分の目で働くことを体感する機会につながっていると思います（就職活動への動機づけ）。そして、四つ目に研究発表や現地での報告会の実施は、学生自身のプレゼンテーション能力の向上や社会人として必要なスキルを実践できる機会となっていることを指摘できます（実践力の養成）。

・フィールドワークの実践的課題

ただし、このようにまとめるともっともらしく見えますが、ある意味でこれらのことは結果論だという気がしています。したがって、冒頭でも触れた大学の授業の一環として行われているフィールドワークは何を目指すものなのか、という問題を改めて検討する必要があるかと思えます。

私自身は、フィールドワークを本学においては出口戦略として位置づけられないだろうかと考えています。昨今、職業型教育の必要性も取り沙汰されていますが、そうではなく、いろいろな仕事があるのだという職業観や実践力を養成する機会として考えることです。さらに、本学の北海道出身の学生が多いことを鑑みて地域認識を育む機会としてトップ

アップ型の教育ツールとしてフィールドワークを位置づけることも可能です。

現状では、各調査系科目が専門領域を土台に実施されていますが、本学全体の教育指針としてフィールドワークの調査系科目はどのような位置づけとなっているのかについては今のところ、明確にはなっていない気がしています。したがって、今回このような報告の機会をいただいたのでフィールドワークの本学における位置づけについて、あえて問題提起させていただきます。

・結びにかえて — 大学が求められる地域貢献 — 求められている地域貢献とは？

最後に、フィールドワークを活用した地域貢献のあり方について私見をのべさせていただきます。方向性としては2つあるのではないかと考えました。一つは、地域ニーズに徹底的に応える（運動論・教育論）フィールドワークの展開です。音更町での実践は、偶然的とはいえ先方のニーズを汲みながら調査実習を実施できたことが一つの連携関係を作り出すことになりました。実際に現場に行ってみると、こういうことをしたいのだがマンパワーが足りない、という声を良く耳にしました。普段、大学では見えないようなことを、地域に入って行って課題を発見、認識して関わっていく、ということも重要なのではないだろうかと思います。ただし、大学として関わっていく際にはこちらもそれなりの成果を期待することも必要です。したがって、本学の研究・教育・広報という側面と「地域の御用聞き」という側面とを兼ね備えた戦略を打ち立てるのも一つの案として考えられるのではないかと思います。

もう一つは、研究・教育拠点地域を作り出す（学術論・政策論）ようなフィールドワークの展開です。従来のCOCなどは、産学官連携や立地自治体への貢献が地域貢献とほぼ同義で語られています。そうではなく、「ガクイ

ンといえば〇〇地域の活性化に貢献している」というようにどこか特定の自治体に肩入れするという方法でも良いかもしれませんが、地方に本学の研究・教育拠点を作り出して、積極的に教育資源を活用していくという方向性もあるのかもしれません。

・地域貢献を前進させるために…

そして、これはあくまでも補論ですが、このようなフィールドワークを展開するためにはどうすればよいかという問題について考えた場合、やはり体制づくりと窓口を一本化が必要なのではないかと考えました。というのも、現行のカリキュラム体系では、全学一斉に取り組むことは困難であるというのが私の認識です。しかし、これからの大学の戦略を考えた場合、各学部のカリキュラムを保持しつつも、調査系科目を統一的な理念や目的、位置づけを明確にしたうえで広報や大学の地域貢献の体制づくりが大きな課題として横たわっているのではないかと考えております。

以上、私の報告は話題提供といった域を出るものではございませんが、ご清聴ありがとうございました。

大國：ありがとうございました。音更からのリクエストに応じて学生を連れてというあたりが、先ほどの山本先生のところともオーバーラップしながら、大学が持っている若い人の実践力が、実は結構、注目されているのかもしれません。佐々木先生のご報告に関して簡単な質問等がございましたらお願いします。

小内：簡単な質問ですが私は、産業調査実習は4単位だとばかり思っていたのですが、あれだけやって2単位にしているというのは、何か理由があるのでしょうか。なかなか学生が集まらないと思うのですが。

佐々木：ご質問をありがとうございます。実は高原一隆先生のところは、4単位だったと伺っております。詳細な経緯はわかりませんが、おそらくカリキュラム改変の際に通年開講は学生の負担が大きくなるだろうという声もあったのではないかと思います。しかも産業踏査演習は選択科目に位置しておりますので、必修でもないのに4単位だと受講生はごく少数にとどまると判断されたと推察しています。しかし、2単位になっても実際の活動は大きな変更はないために、単位の割に合わないという現実があります。ですから現状としては、私のゼミ生を受講生として充填している形になっています。

小内：ゼミとかぶっているからやる、という感じですか。

佐々木：はい。本来であれば経済学部生ならだれでも受講できます。しかし、受講生がいなかったので開講できませんでしたというのも納得しがたいので、自分のゼミ生に受講してもらっています。おそらくゼミ生は義務化されて、嫌々ながらもかもしれません。ですが、現地調査に行くと、それなりに学生自身も面白さを感じているようなので開講する意味はあるのかなと思っています。実は2年前にカリキュラム改変して4単位に戻したのですが、来年履修者がどのくらいになるかと考えているところです。

小内：新しいのは4単位なのですね。

佐々木：はい。4単位にしました。

平澤：単位の問題だけではなくて、経済学部のカリキュラムのなかで、実は実習科目は低い位置しか与えられていない。産業調査演習は選択必修に入っていない。だから、結局、実習科目とか外国

語講読などはとる人が少なくなる。

大國：平澤先生、補足をありがとうございます。他にご質問はございますか。今のところ、産業調査実習はゼミ生だけですか。

佐々木：今年の産業調査演習は、ゼミ生の他に17名で実施しました。最近、他のゼミの学生もちょっと面白そうだからと受講するようになってきているのは喜ばしいことです。反面、10名を超えると一人で指導に当たるのは若干厳しいと感じています。農家調査や企業訪問でも、さすがに15人で一気に何うわけにいかないですからね。そういう教員側の負担も学生の人数が増えると生じてくるかなと最近、思っています。

佐藤：フィールドワークの目的論的類型（仮説）の運動論、政策論、学術論、教育論、この切り口はうまく表現されていると思っています。ただ、学生たちがいろいろなところに行き、いろいろなことを聞こうとするのですが、その前段での、例えば調査票とかみんなとヒアリングしますと、バラバラであってはまたちょっと後での指導が大変ですよ。前座で予備工程でのそういう指導って非常に重要だと思いますが、それにたいしてはどれくらいの時間をかけられたのでしょうか。

佐々木：ありがとうございます。前期開講科目である産業調査演習は4月、5月はそういう調査方法とか、どういう資料があるのかということに時間をかけて指導しています。私も最初の数年間は張り切って地域調査法のテキストを買って読みなさいと指導していたのですが、全然買ってくれないのです。けれども、方法論がないとただ現地に行ってみただけを捉えるだけになってしまうので、その準備作業の工夫が

非常に苦勞しています。やはりこちらでお膳立てをしなければいけないというのが現状なので、そこをどう先ほど山本先生ではありませんが、主体的にやってもらうか、というところの仕掛けをどうするかな、というのが僕自身の課題にもなっています。

佐藤：僕も、いろいろな分野でそうだと思うのですよね。一見、面白い発想でした。

佐々木：ありがとうございます。

大國：ありがとうございました。佐々木先生、ご報告ありがとうございました。

佐々木：ありがとうございました。（拍手）